

編者はしがき

本篇「聖典講義篇 山上の垂訓の示す真理」は、新約聖書「マタイ伝」と「ルカ伝」に収められているイエス・キリストの言葉で最も有名な「山上の垂訓」について解釈された一書である。

本全集「生命の實相」には、本篇第四十八巻とともに「生長の家」より観たる『創世記』(第十九巻「万教帰一篇 真理の扉を開く(上)」)の二著がキリスト教についてのまとまった解釈書として収録されている。

谷口雅春先生の教えの大きな特徴は「万教帰一」である。「万教帰一」とは各宗教は違いを超えて仲良くしようといった安易で表面的な気休めの提唱ではない。すべての宗教は、それが本物の宗教である限り根本の真理は同一であり、人間はみな神性・仏性を持っている「神の子」「仏の子」だということである。だから人間は既に救われており、それを自覚さえすれば自ずと幸福が訪れると説く。それなのになぜ人間は不幸や病氣や死で苦しむのかと思うかもしれない。しかし、それらは神が造り給うたのではない。だから本来は存在せず、人間の心が勝手に造り上げた妄想である。それを妄想であると自覚さえすれば、その妄想は自ずと消え去ってしまうのである。だから、谷口雅春先生の教えを受けた人々に無数の奇蹟的体験が生まれたのである。

谷口雅春先生はこの根本真理の把握によって聖書や仏典を読み解いていかれ、そして聖書も仏典も同じ真理を説いていることを明らかにされる。谷口雅春先生にはキリスト教関係では旧約聖書の「創世記」、新約聖書では本篇「山上の垂訓」そして「ヨハネ傳講義」といった著作があり、仏教では「無門關解釋」「維摩經解釋」「碧巖錄解釋」等のまとまった解釈本がある。そして本全集の到るところでキリストの説かれた

教えと釈尊の説かれた教えが同じ真理を指し示していることを説かれている。

しかも、その真理はキリスト教・仏教にとどまらない。大本教の教祖・出口なおや天理教の教祖・中山みき、黒住教の教祖・黒住宗忠などの教えにも及び、それぞれのお筆先や教えについての解釈もなされ、それらの教えが見事に一致して一つの真理を説いていることを明かされていく。

谷口雅春先生は青年時代の苦しい求道時代を経て、遂に神の啓示を得て真理に到達された。その真理こそが、人間は「神の子」であり、この世界は「神の創造された実相世界のみの世界」であり、すべての宗教は一つの真理を指し示す「万教帰一」と説かれる。本篇の「山上の垂訓」の解釈もまたその一直線上にある。

さて、本篇「山上の垂訓の示す真理」についてであるが、「山上の垂訓」は新約聖書「マルコ伝」と「ルカ伝」で述べられており、山上でイエス・キリストが弟子達に語った有名な教えである。谷口雅春先生は本書で次のように語られている。

「これは「山上の垂訓」といって、有名なところでありまして、イエスがヨハネに洗礼を受けてから、ヨルダン河の畔で四十日四十夜断食をして、坐っておられました。が、いよいよ霊覚を得て悟を開かれた、その悟の心境をは初めてここで説教された最も重要なところであります」（一頁）

そして「山上の垂訓」中にあるイエス・キリストの言葉を順次解釈されていく。たとえば「幸福なるかな、心の貧しきもの。天国はその人のものなり」の意味の解釈を次のように説かれる。

「この「心の貧しき者」というのはどういう意味であるかと申しますと「心の高慢でないもの」という意味であります。高慢であるということが最も神に近づく邪魔になるのであります。高慢でないことを「生長の家」では「心が貧しい」という言葉を使っているのであります。高慢である人は心の水圧が高いのでありますから、いくら真理の水の流れを供給して差上げてでもその人の方へは流れて行かないのであります。（中略）「偽存在の自分」に満足して、それで充ち足りたつもりでいる、これが「心の貧しくない」人、心のたかぶっている人のことであります」（一頁～二頁）

また、「人もし汝^{なむ}の右^{みぎ}の頬^{ほほ}をうたば、左をも向けよ」の有名な言葉についても谷口雅春先生は次のように言及されている。

「一度実相の世界に直参^{じきさん}して、それから現象世界へ吾^{われ}々の生活を投影して来ますと、因縁、因果に縛^{しば}られない、自由自在の生活を送ることが出来るようになるのであります。この自由自在の生活に入った時に、はじめて我々は、キリストがここにいつているように、「人もし汝^{なむ}の右^{みぎ}の頬^{ほほ}を打たば、左をも向けよ。汝^{なむ}を訟^{うた}えて下衣^{したぎ}を取らんとする者には上衣^{うわぎ}をも取らせよ。人もし汝^{なむ}に一里行く事を強いなば、共に二里行け。汝^{なむ}に請^こう者に与え、借^からんとする者を拒むな。」こういうふうな、自由自在な生活が現れて来るのであります。ここにもし人があって、自分の右の頬^{ほほ}を打ったならば、どんな時にも常にイエスの教え通りに是非とも左の頬^{ほほ}をも廻^{めぐ}らして、それに向けなければならぬかというのと、必ずしもこの通りに実際にやらなければならぬこととはないのではありません。すべて、杓子定規^{しやくしじょうぎ}に、心の自由を忘れて形の上で凝^こり固まってしましますと人間は自由自在を失うのであります。自由自在を失えば実相から遠^{とほざ}かるのです。

イエス自身も、形の上で無抵抗を常にはやってはいなかったのでありまして……」
(一三三～一三三頁)

そして、イエス・キリストが「神は善人にも悪人にも神の愛が一樣に照り輝いている」と述べている部分に対して、谷口雅春先生は「流石^{さすが}に神の実相を知っていられたわけでありませう」とイエス・キリストを讃^たえておられるのである。

本篇によって、イエス・キリストの真の教えを体得せられれば幸いである。

令和三年九月吉日

谷口雅春著作編纂委員会